

「藁の上の禿頭」

上田
迅

登場人物

夏目 裕一	(49)	夏目家の大黒柱。保険会社営業マン。
夏目 菜摘	23)	裕一の娘。就職2年目。
(夏目沙	46)	裕一の妻。専業主婦。
希子	28	
日比野 紀子	(34)	養子幹旋NPO『舟の会』事務員。
沢 尻	(38)	菜摘の上司であり、不倫相手。
矢 部	()	市役所職員。
番台のおばちゃん		
裕一の親戚		
産婦人科の受付女性A		
産婦人科医		
助産師		
産婦人科の受付女性B		
高齢の女性A		
タクシー運転手		
子供を手放す母親		
紀子の祖父	(80)	
	80	
夏目 郁枝	()	裕一の母。
夏目 義博	()	裕一の父。

○40年前・銭湯・中（夜）

湯船から熱気が立ち昇っている。

幼い少年・夏目裕一⁽⁶⁾が湯船に潜った
り、泳いだりしている。

声「ほら、やめなさい」

裕一、顔を上げ声の主を見る。

癖の強い東北訛り、だいぶ禿げ上がっ

た頭の父・義博⁽⁴⁾。

裕一「だってプールみたいで楽しいんだもん」

義博「お前プールの授業はサボるじゃないか。人様に

迷惑かけるな」

裕一「迷惑なんて誰も言っていない」

裕一、再び潜ろうとすると、義博に頭を叩

かれる。

義博「アホ、みんな他人だから言わないだけで、心
の底から迷惑だと思ってるわ」

裕一「父ちゃんは他人じゃないの？」

義博「家族は他人とは違う。お前は俺だし、お前は

母ちゃんだ」

裕一「じゃあ、父ちゃんは母ちゃんってこ

と？」

義博「（面倒臭くて）そうなるね」

裕一「うげえ」

義博「もう出るぞ、逆上せる」

裕一「え、待って。じゃあユウもそのうち父ちゃん
みたいに頭ツルツルになるの？」

義博、意地悪な笑みを浮かべる。義

博「当たり前だろ。すぐだぞ」

裕一「ええ！終わった……」

義博「やかましいっ！このっ！」

義博に髪をぐしゃぐしゃにされる裕一。湯船
ではしゃぐ仲睦まじい父子を一層
迷惑そうに見る入浴客たち。

○同・脱衣所

鏡の前に並ぶ裕一と義博。

トントンと顔や頭にメントールの化粧水を
染み込ませる義博を真似て、顔に液体をつ
ける裕一。

裕一「ああ！ヒリヒリするう」

義博 「お前にはまだ早い」

裕一 「これ顔につけるもんだよ？頭につけるも
んじやないよ」

義博 「知ってるけど、俺の場合は顔も頭も」

裕一 「（食い気味に）似たようなもんか」

義博 「やかましい」

タオル一枚姿のまま、再び化粧水を付ける

二人。

二人 「くうー、染みるう」

番台のおばちゃんが顔を覗かせる。

おばちゃん 「あんたらしいの？お母さんとつくに上
がって外で待ってるよ」

義博 「やばい」

裕一 「怒られる」

慌てて服を着始める似た者親子な裕一、義博。

○ 同・表

白い息を吐きながら待っている裕一の母・

郁枝。

裕一と義博が表に出てくる。

裕一「母ちゃん、待った？」

郁枝「ううん！今出たところよ」

郁枝が凍える両手を擦り合わせている。裕一、
郁枝の手を握る。

裕一「冷たっ！」

郁枝「そう？」

裕一「行こ！早く帰ろ！」

3人、歩き出す。

裕一「父ちゃんがね、シャンプーもリンスもするん
よ。意味ないのに」

義博「お前、禿げイジリすぎだぞ」

郁枝「だからこんなに時間かかったんだ」裕一

「そう。めっちゃ時間かけてた」

義博「お前汚いな！バチ当たれ」

郁枝「父ちゃんは今日は湯たんぽ無しだね」

裕一「うん、今日は父ちゃん、ひとりで寝て」義博

「ええっ……」

呆然とする義博を置き去りに、歩いていく

裕一と郁枝。

裕一、振り返って義博に手招きする。5

裕一「何してんの！早く！」義

博「え、あ、ああ……」

義博、裕一の手をしっかりと握る。

手を繋いだ3人が並んで歩いていく。幸せに満ちた家族の風景。

T 『藁の上の禿頭』

○現在・夏目家・中・和室（リビング）（夜）

洋服棚の扉が開き、中の鏡に映る禿頭

の中年男・裕一。(49)

スーツの上着やネクタイを外し、ハンガーにかけていく。

(46)

台所の妻・沙希子が料理を食卓に並べている。

沙希子「ねえ、日曜だったわよね？三回忌」裕一

「ん？ああ」

沙希子「お義父さん、ちゃんとお坊さんお願いして

るかしら」

裕一「笑い大丈夫だろ」

沙希子「もう8よ？忘れっぽくなってきたる

だろうし、ちょっと確認しておいた方がい

いんじゃない？」

裕一「いやあ、いいよ」

沙希子「だって結構な人数来るのよね？それで忘れ

てましたなんてことになったら、あ

なた責められるわよ？一人息子なのにとって」裕一

「嫌がるんだよ、俺に干渉されんの」

沙希子「なんでよ」

裕一「いや、知らないけど。昔からそう。何でも自

分でやりたがるんだよあの人は」

沙希子「まあ、大丈夫ならいいけど。お義母さんに

恥かかせないようにしないと」

裕一「分かってるよ」
(23)

娘・菜摘 が帰宅する。

その表情は浮かない。

沙希子「ああ、なっちゃん、おかえり。今ちょうど

ご飯できたところ」

菜摘「いらない」

沙希子「体調でも悪いの？」

裕一 「なんだ？風邪か？」

菜摘、言い出しにくそうに身体を揺らしている。

裕一 「どうした、言いたいことあるなら言えよ」

菜摘 「え……別に」

裕一 「お前、俺の目を誤魔化せると思ってたのか？お前がゆらゆら揺れてる時は後ろめたいこと隠してる時！」

沙希子 「なっちゃん分かりやすいもんね」得意げに笑い合う裕一と沙希子。

菜摘、観念したように息を深く吐き、菜摘

「……私、妊娠した」

予想外の告白に、長い沈黙が流れる。裕

一・沙希子 「……は？」

× × ×

食卓を囲む裕一、沙希子、菜摘。手付かずの料理が、空気の重さを際立たせる。

裕一 「それで、相手は何て言ってるんだ

菜摘 「まだ言っていない。ていうか、言えないよ」

沙希子 「言えないよって、ずっと隠しておく訳にはいかないでしょ？」

菜摘 「だってあっちには奥さんも子供もいるんだ

よ？そんなの……言えない」

裕一 「（呆れ）何でお前、よりによって不倫なんて……お前まだだぞ？社会人二年目のペーパーが仕事もせずによくそんなこと……」

菜摘 「仕事はしてるよ。色々教えてくれる先輩だったから……」

裕一 「だからってお前、わざわざそんな妻子持ちなんかと」

菜摘 「分かってるよ。こんな関係よくないって、私が一番よく分かってる」

沙希子 「それで、どうするつもりなのよ」菜摘

「……わかんない」

裕一 「わかんないってお前、決まってるだろ。堕ろせ。相手にもちゃんと話して責任取ら

せる」

菜摘 「責任って？」

裕一 「いやだから、ほら。金のこととか」菜摘

「お金？今お金の話？」

裕一 「いや、そういうことじゃなくて……とにかく、すぐに堕ろせ！いいな？」

沙希子 「あなた」

菜摘 「そんな簡単に言わないですよ……」

裕一 「じゃあ、何だ？産むつもりなのか」菜摘

「だから分かんないって」

裕一 「お前よく考えてみる、お前なんてまだ子供みたいなもんだぞ？子供が子供産んで育てられんのか？」

菜摘 「……」

裕一 「それにお前、子供の気持ちになってみろよ。

父親の顔も分からない子供なんて、不幸だろうよ」

菜摘 「もう、うるさい！ちよっと考えさせて」席を立

ち、リビングを出て行く菜摘。

沙希子 「なっちゃん！」

裕一「おい、まだ話終わってないぞ！」

二階の菜摘の部屋が勢いよく閉まる。沙希

子「どうしよう……」

裕一「そんなの、考えるまでもないだろ」沙希

子「でも……」

裕一「お前まで迷うなよ！何が正しいかなんて、考えなくたって分かるだろ！」

沙希子、裕一の強い口調に押し黙る。注い

だビールを息荒く流し込む裕一。

○同・外観（数日後・朝）

○同・玄関

喪服姿の裕一と沙希子、慌てた様子で靴を履いている。

裕一「何でお前、ネクタイくらい用意しておかないんだ！」

沙希子「だってバタバタしてたし、色々考えることもあったから」

裕一「それはそれだろ！しっかりしてくれよ」

沙希子「分かってるわよ」

裕一「……あいつは？」

沙希子「行きたくないって」

裕一「バカ……そんなの許されると思ってんのか」
履きかけた靴を脱ぎ、階段を上ろうとする

裕一。

その腕をすぐに掴む沙希子。

沙希子「あなたとも……話したくないって」裕一
「……ふざけるな！」

階段を駆け上がるようにする裕一を再び制止する沙希子。

沙希子「分かったから！私が説得するから。あなたは車乗ってて」

沙希子が裕一を交わして二階へ上がって行く。

裕一「（慥然と）……」

○車内

運転席の裕一、助手席には沙希子、後

部座席の菜摘は不貞腐れたように外を見つめている。

裕一、バックミラーで菜摘を確認し、裕一

「おい、決めたのか？」

菜摘「……」

沙希子「あなた（と制止）」

裕一「金は俺が出してやるから、明日会社休んで病院行ってこい」菜

摘「……おろして」

裕一「ああ、墮ろしてこい」

菜摘「違う、車降ろして。帰る」裕

一「お前……」

沙希子「あなた、今日はもうやめてあげて。お義父さんもなっちゃんが来るの楽しみにしてるんだから。ね？」

裕一「……」

菜摘「……」

重たい空気を乗せたまま走って行く車

○義博の家・玄関

扉を開けて入って来る裕一ら。

裕一「父ちゃん、来たよー」

そこにバタバタと走って来る親戚たち。親戚

「遅いよ裕一くん！何やってたの！」

裕一「え？すいませんちよっと……」

親戚「大変だよ、お坊さん。まだ来てなくて」裕一
「え？」

裕一、沙希子の『ほら見たことか』という
視線を感じる。

○同・廊下（時間経過）

和室から笑い声が聞こえる。

一人離れ、スマホを見ている。

『今日会えない？』という菜摘のメール
に、『家族といえるから厳しい』と不倫相手
からの返信が来る。

菜摘「ため息……」

○同・和室

仏壇から遺影の郁枝が笑顔で見つめる

先、和室で寿司を囲んでいる一同。
沙希子が笑顔を振りまいて親戚たちに酒を
注いで回る中、裕一は親しい親戚と酒を交
わしている。

親戚「いや、まあ良かったよね。食事は頼んでくれ
てて」

裕一「（恐縮し）ホント、すみません」

親戚「義博さんは坊主ちゃんと頼んだって言
*てるけどさ、もうほら、歳もあるから」裕一

「…：はい」

親戚「（ ）笑って あれ、そういえば義博さん
どこ行っちゃったんだろ？」

裕一「居づらいんだと思います。こういうことは、
きちんとやる人だったんで」

親戚「別にいいのに。…：でもさあ、裕一くん、そ
ろそろ面倒見てあげた方がいいんじゃない？」

裕一「いやあ、本人が嫌がりますから」
親戚「まあ、頑固な人だからね。でもさ、こんな大
きい家に一人で住んでたってね、寂

裕一「あー、分かってる分かってる」

義博「……」

黙り込んでしまう義博。

裕一、話題を変えようと、

裕一「なんか……汚い庭になっちゃったよなあ」

芝は剥げ、色気を失った植物が無造作に生

い茂る庭を見つめる裕一。

裕一「手入れとかしてないだろ。母ちゃん見たら泣くよ」

義博「もういいだろう。誰が見にくる訳でもない」

廊下の先、裕一と義博の姿を見つけた菜摘

が何となく聞き耳を立てる。

裕一「ここもだいぶボロくなっただし、そろそろ売ったら？まだそこそこの値段付くんじやない？」

義博「こんな家、一銭にもならんだろ」

裕一「いや、でもさ、寂しいでしょ。いつまでも一人です」

義博 「この歳で寂しいも何もあるか」

裕一 「……ほら、掃除とかも大変じゃん？」義博

「掃除は好きだ」

裕一 「ああ……そう……」

同居を匂わすも靡かない義博に頭を搔く裕

一。

裕一 「……あ、そうだ銭湯！まだあそこにある？」

義博 「あるよ。週に二回くらい行く」

裕一 「へえ、懐かしいな。ちよつと久々に行こう

よ」

義博 「……」

裕一 「いや、でもあれか。今父ちゃんと並んだら禿

げが二つ並んじゃって、あれかな」

下手な笑顔を作る裕一。義

博 「裕一」

裕一 「ん、何？」

義博 「……お前、俺と縁切れ」裕

一 「……え？」

廊下の菜摘も驚いた様子で、

菜摘 「……？」

裕一 「え、ごめん？ どういうこと？」

義博 「お前はな、俺たちの子供じゃない」裕一

「は？」

義博 「お前と俺たちは、血が繋がってない」菜摘

「！」

裕一の顔が笑顔を消し忘れたまま引き攣つていく。

裕一 「え、どういうこと？ 言ってる意味がわかんないんだけど」

義博 「お前は、養子だ。他人なんだ。だから俺の面倒みようなんてしてくれなくていいぞ。もう来てくれなくていい」

義博、冷たく言い放つと、廊下を戻って行く。

裕一 「……え？」

裕一、放心したように義博を見る。視線の先にいる菜摘、咄嗟に隠れる。しかし、義博が角を曲がると目が合ってしまった。

菜摘「（気まずく）……」

義博「……」

義博、無言で和室に戻っていく。菜

摘「……」

菜摘、不安そうに裕一を見つめる。

○車内

帰りの道中、行きよりも重たい空気が支配している。

沙希子「ああ、顔が疲れた。あなた一人息子なんだから、もうちよつと手伝って欲しいわよ」

黙ってハンドルを握り続ける裕一。

沙希子「ほんと私ばかり動いて。吞んでればいい

人はいいわねえ」

沙希子の皮肉も裕一の耳には届かない。上の

空な裕一の目を、バックミラー越

しに見ている菜摘。

菜摘「……」

○同・表（日替わり・早朝）

まだ空が白んでいる中、スーツ姿の裕一が出て来る。

未だ事態を把握できないような表情で歩いていく。

○同・リビング

寝起きの菜摘が入って来る。

沙希子、朝食の準備をしながら、沙

希子「おはよう」

菜摘「ねえ、お父さんは？」

沙希子「もうとっくに出たわよ。あなたもほら、急がないと遅刻じゃない？」

菜摘「うん……」

沙希子「お父さんと落ち着いて話す気になった？夜みんなでもう一回話そうか」

菜摘「……今日は遅くなるから」

洗面所に去って行く菜摘を、心配そうに見つめる沙希子。

○路上

通勤の雑踏の中、放心したように歩いている裕一。

信号を渡る途中、小さな子供連れの夫婦の笑顔が目にとまる。

裕一「……」

× × ×

✓ラッシュユ。義博の家。

義博「お前はな、俺たちの子供じゃない」

✓ラッシュユ。自宅内。

菜摘を説得する裕一。

裕一「お前、子供の気持ちになってみるよ。父親の顔も分からない子供なんて、不幸だろうよ」

菜摘「……」

× × ×

信号が点滅する。

周囲が急いで渡る中、立ち尽くす裕一。裕一

「……」

信号が赤に変わり、横断歩道の裕一に
クラクションが浴びせられる。裕

一「……」

何か思い立ったように踵を返す裕一。

○喫茶店・中

菜摘の不倫相手・沢尻 (34) が入って来
て辺りを見回す。

菜摘「（手を挙げ）……」

沢尻「（近付き）どうしたの、こんなところ呼
び出して。会社じゃダメな話？」

菜摘「……うん、ちよつと」
× × ×

*ーヒーを持つ沢尻の手が止まる。

沢尻「……マジ？」
（……）

菜摘「苦笑い うん……マジ」

沢尻「……なんか、ごめんね」

菜摘「ううん、私も、あれだったから」沢尻

「えつと……いくらかかる？」

菜摘「……え？」

沢尻 「あ、いや、ごめん、動揺しちゃって
：あ、でもいいのか…：あの、墮ろすの、いく
らかかるの？」

菜摘 「え…：…？」

沢尻 「え、ごめん。だって、そうでしょ？」菜摘

「ああ…：うん」

明らかな安堵を見せる沢尻。

沢尻 「まあ、ちよつとしばらく俺ら会わないように
しようか。ほら、なんか俺も反省しなきゃいけ
ないし…：…」

菜摘 「…：…」

○市役所・中

待合の席で順番を待っている裕一。裕一
「…：…」

紙資料を持って受付にやって来る、
の良さそうな市役所職員の矢部 (38)人。

矢部 「231番の方、お待ちせしました」
裕一、矢部の前に座る。

矢部 「えーと、こちらが夏目様の戸籍謄本に

なりますね」

裕一が戸籍謄本を手にする。

食いつくように眺めるが、どこにも養子で

ある記載はない。

矢部「お間違いありませんか？」裕

一「あ、はい……」

なかなか席を立とうとしない裕一。矢部

「えーと……」

裕一「あ、すいません。ありがとうございます」

裕一、一度席を立ち、去ろうとする。矢部

「232番の方、お待たせしましたー」次の客が待

合席を立った瞬間、裕一が

踵を返して矢部に近付く。裕

一「あの、すいません」

矢部「はい？」

肩を揺らしている裕一。

矢部は裕一の言葉を待っている。

裕一「……養子だけど、戸籍上は実子になってるこ

とってあり得ますか？」

矢部 「へ？」

裕一 「あ、いえ……ちよつと気になる事があつて」

矢部 「えーと、そうですね。ちよつとお待ちください
い」

引き出しから戸籍の記載例の用紙を取り出す矢部。

矢部 「用紙を見せながら 通常の養子縁組
ですと、お名前の隣に[（]養子縁組[）]という記載
がされます。特別養子縁組の場合は養子と明記
はされませんが、民法817条の2という記載が
されますので、養子である場合は、見れば分か
るかと思えますが」

裕一 「あ、そうですね。すいません、何かの間違
いでした」

裕一、困惑した笑顔を浮かべて去ろうとす
る。

矢部は裕一の様子を察し、矢

部 「あの、お客様」

裕一 「（振り返り）？」

矢部 「大変失礼ですが、ご自身が養子である

かどうかのご確認ですか？」裕

一 「……そうです」

矢部 「えーと、すみませんが、お客様は何年の生まれでいらっしゃいますか？」

裕 「昭和……46年ですけど」矢

部、少し考えて、

矢部 「あの、あくまで可能性のお話になってしましますが。……もらい子というのをご存知ですか？」

裕 「もらい子？いえ……」

矢部 「養親と子供が戸籍上も実子扱いになる

1988

特別養子縁組制度は、
年に制定された

ものなんです。これは、産みの親御さんが

法律上の親子関係を放棄することを希望した場合や、養親が法律上も実の親子関係を結びたいと希望した際に結ばれる養子縁組です。この制度ができる以前は、子供を育てられない、産んだことを記録にも残したくない場合の選択肢は中絶しかないとされ

ていました。しかし、親の都合で命を奪われる子供たちに心を痛めた医師が、違法行為を犯して子供を救っていたという事例があります」

裕一 「違法行為……？」

矢部 「はい。中絶を希望する親に、戸籍に出生の記録を残さないという条件で出産させる。そして産まれた子を養親になりたい夫婦の元にこっそりと渡すんです。出生届などを偽造し、養親の実子であるように見せかけて」

裕一 「そんな……そんなことって」

矢部 「実際にそのようなことを行っていた医師は少なからず全国にいたと言われています。まあ、憶測の域を出ませんが……」

裕一 「……つまり、戸籍上実子でも、本当は養子としてとがあり得るってことですか……」

……？」

矢部 「……はい」

裕一 「……」

○夏目家・表（夜）

足取り重く帰ってくる裕一。

夏目の表札が他人の家のように思える。裕一

「……」

○同・リビング

裕一が入って来ると、心配そうに駆け寄る

沙希子。

沙希子「どこ行ってたのよ、会社から電話あつたわ

よ」

裕一「……」

沙希子「出社もしてない、電話にも出ないって。ね

え、どこ行ってたわけ？」

裕一「……どこだっさいいだろ」沙

希子「何よそれ、怪しい」

裕一「……」

答えず上着を脱いでいる裕一。

沙希子「あなたがどこで何してようが構わな

いけどね、菜摘の事だつてあるんだからね」

裕一「……分かってるよ」

沙希子「朝せつかく菜摘があなたと話したそうにしてたのに。会社サボってどっか行って、あなたこそしつかりしてよ父親なんだから」

裕一「……」

沙希子「あなたがグタグタしてる間にお腹の赤ちゃんもどんどん大きくなるのよ？ちゃんとお互い落ち着いて話し合って……」

裕一「遮り分かってるって言ってるだろ！^(へ)うるさいんだお前は！」

沙希子、いつものように裕一の圧に押しされるが、

沙希子「……あなたってそうよね。都合が悪くなると怒鳴って黙らせて。家族と一番向き合ってないのはあなたじゃない」

部屋を飛び出し、二階の寝室へ上がって行く沙希子。

裕一「……」

裕一、上着を投げ捨て、食卓に座る

菜摘の声「ねえ」

振り返ると菜摘が立っている。

裕一「（振り返り）ああ……すまんな、ちゃんと話できてなくて」

菜摘「別に。こっちも話したくないし」裕一

「……」

菜摘「お父さんは？」裕

一「え、何？」

菜摘「行って来たんじゃないの？戸籍取りに」裕一

「お前、なんで……」

菜摘「ごめんこないだ話してるの聞いちゃった。お

父さん、養子なんでしょ？」

裕一「……」

菜摘「で、分かったの？本当の親の居場所」裕一

「……お爺ちゃんがちよつとボケてきた

（
）
だけだ。俺は養子なんかじゃ……言い切れない」

菜摘「そっかそっか、分かんなかったんだ。

まあ、いいじゃん。もう歳とって死んでるかも

しれないし、生きててもそんな昔のこ

と、覚えてないかもよ」

裕一「……うるさい」

菜摘「こんなおじさんになって本当の親のこ
と知ったって、どうしようもないもんね？」裕一
「何が言いたいんだお前」

菜摘、裕一の顔をまじまじと見つめる。裕一

「……なんだよ」

菜摘「ううん、お父さんの言った通りだなんて思っ
て」

裕一「あ？」

菜摘「今のお父さん、不幸な顔してる」

裕一、頭に血が上り、机を激しく叩く。裕一

「なんだ！お前、親に向かって！」

先ほどの沙希子の言葉を思い出し、すぐに

冷静になろうとする裕一。

裕一「……そんなこと言いに来たのか？」

菜摘「冷ややかに私のことは心配しない
で。親の顔知らない子がどんな思いで過
すのか、参考になった。ありがとう」菜摘

がリビングを出て行く。

一歩も動くことができない裕一。

○ 銭湯・中

表情なく湯船に浸かっている義博。
はしゃいで走り回っている子供をじっと見
つめる。

義博 「……………」

× × ×

✓ ラッシュユ。子供の裕一との銭湯。

義博 「家族は他人とは違う。お前は俺だし、お前は
母ちゃんだ」

裕一 「え、じゃあユウもそのうち父ちゃんみたいに
頭ツルツルになるの？」

義博 「当たり前前だろ。すぐだぞ」裕

一 「ええ！終わった……………」

義博 「[×]やかまし[×]いっ！[×]このっ！」

✓ ラッシュユ。銭湯・表。

手を繋いで歩く少年の裕一と両親。

義博 「あーあったまったからアイス食べたく

なつて来たな」

裕一「ええ、こんな寒いのに？」

義博「バカお前、こんなの寒いうちに入らんとぞ。俺と母さんが石巻に住んでた時なんて、こんなもんじゃなかった」

郁枝「あー、寒かったよねえ」裕

一「イシノマキって？」

義博「東北だよ、宮城。俺も母さんも、お前が産まれるまでそこで暮らしてた」

裕一「へえ」

郁枝「（不自然に遮り）あーなんか、私もアイス食べたくなくなってきちゃった」

裕一「じゃあ、ユウも！」

義博「ダメだよ！お前らは湯たんぽの湯でも飲んどけ！」

裕一・郁枝「ええ……最低」楽

しく歩いて行く三人。

○夏目家・リビング

一人食卓に佇む裕一。

同じ記憶を思い出していたようで。

裕一「……」

○石巻・タクシー・車内（日替わり・朝）

ひと気のない通りを走るタクシー。

裕一、震災の痛々しい傷跡が未だに残る街

並みに不安を感じながら。

裕一「……」

○石巻の産婦人科・表

、較的新しい産婦人科。

タクシーを降り、中に入って行く裕一。

○同・ロビー

中年の受付女性に聞き込みをする裕一。裕一

「あの、突然すみません」

受付女性「はい？」

裕一「昔こちらで、出産の際にもらい子をしていた

ようなことってありますか？」

怪訝な表情を浮かべる受付女性。

受付女性「もらい子？と申しますと？」

裕一「あの、違法な……いや、違法といますか。

産まれた子供を手続きなしでこっそり里親に渡すみたいなの……」

受付女性「仰っている意味がよくわかりませんが……」

待合の妊婦たちも怪訝な顔で裕一を見つめる。

裕一「あ、そうですね。あの、特別養子縁組ができる前の話なんですけど」

受付女性「うちはまだ開業して浅いので、そのようなことは一切やっておりますが」

裕一「そうですね……すみません不躰に」

○様々な産婦人科・点描

産婦人科医に聞き込みを行う裕一。

産婦人科医「いやあ、聞いたことはありませんけど、うちでは……」

裕一「そうですか……」

別の助産院。

助産師「私も長いことやってるけどね、ここらじや聞いたことないよ」

裕一「……」

×

×

×

別の産婦人科。

受付「お引き取りください！うちはそんな病院じゃありませんので！」

裕一「すみません……」

○石巻・漁港

高齢の人々に声をかけて歩く裕一。裕一「すみませんこの辺に……」

高齢女性A「知らないねえ」

首を横に振る漁師A、残念そうな裕一と近くで子連れの夫婦と仲良く話していた女性・日比野紀子が裕一の様子に気付く。

紀子「……」

× × ×

肩を落として歩いてくる裕一。

紀子の声「あの、すいません！」

振り返ると、紀子が追いかけて来る。紀子、名刺を渡し、

紀子「私、NPOで養子縁組支援をしてる日比野つて言います。なんか、困ってるみたいだったんで」

裕一「（戸惑い会釈し…）」

紀子「もらい子って聞こえたんですけど」

裕一「ああ、昔この辺にそういうことをしていた病院があつたはずなんですけど、どうも手がかりがなくて」

紀子「…それ、うちのおじいちゃんかもしれないです」

裕一「！？」

○軽トラック・車内

運転席でハンドルを握っている裕一と、助手席の紀子。

紀子「いやあ、ごめんなさいね。運転までしてもらっちゃって」

裕一「構いませんよ。何ヶ月ですか？」

紀子のお腹はポッコリと膨らんでいる。紀子

「6ヶ月。実はだいたいぶ運転もキツくなってきたて」

笑顔を絶やさず快活に話す紀子。

裕一「安静にしてた方がいいんじゃないですか？」

紀子「まあそうなんですけどね、助けなきやいけない人、いっぱいいるんで」

裕一「？」

紀子「ああ、私が働いてる『舟の会』ってところは、産みの親御さんと養親の方とを結ぶ橋渡しっていうか、簡単に言うと、養子の斡旋業ですかね」

裕一「はあ」

紀子「一人でも多くの子供に、家族を作ってあげる。これが私の仕事です」

裕一「そうなんですか」

紀子「あ、外、見てください」

裕一、外を見ると荒地が広がっている。裕一

「まだ、こんな状況なんですね……」

紀子「はい。おじいちゃんの病院もここにあったん

ですけど……」

裕一「そうなんですか、今おじいさんは？」紀子

「おじいちゃんは5年前に亡くなって、

おばあちゃんも震災の時に……」裕

一「そうですか……」

紀子「あ、でも当時の資料はおじいちゃんの家に残

ってるはずなんで、安心してください！」

裕一「そういう資料って、全部残ってるんです

か？」

紀子「んー、全部かは分かんないですけど、おじい

ちゃんが言ってたんです。養子に行った子供は誰

でもいつかは本当の親に会いたくなるものだけ

ら、その時手助けできる

ように、資料はずっと残しておくんだって」裕一

「どうしておじいさんは、もらい子を？」

違法だったんですよね？」

紀子「祖父の影響なんですよ。私がこの仕事してるのも。祖父は本当に子供が好きで、震災の時もインフラとかめっちゃくちゃになったのに4人も赤ちゃん取り上げたんですよ？これ凄くないですか？」

裕一「（素直に）……すごいですね」

紀子「単純に助けたかったんでしようね。産まれることなく消えていく命を。親にも色んな事情があるんでしようけど、子供に罪はないじゃないですか」

裕一「そうですね」

紀子「だから、違法だったとしても、おじいちゃんのがやってたことは間違っていないんです。私は尊敬してます」

裕一「立派な方だったんですね」

紀子「はい。あ……でも夏目さんにはごめんなさい。何か苦勞かけてたら」

裕一「ああ、いえ。実は最近そのこと初めて知ったんですよ。なので、今まで何の疑い

もなく過ごしてきました」

紀子「そうですか……何か手掛かり、見つかるとい
いですね」

裕一「……はい」

○日比野毛・外観

古い木造の一軒家。

紀子の声「どうぞ」

○同・書齋

紀子の案内で入って来る裕一。

大量の本や資料が積まれたデスク。

紀子「夏目さんの生まれた年の資料は……」書棚を
探し出す紀子。

裕一、デスクに置かれた一枚の写真を目に
する。

幼い紀子と、祖父母の笑顔の写真。裕一

「これがおじいさん？」

紀子「あ、そうです。夏目さんのことを取り上げた
かもしれない、お医者さんです」

裕一「……」

自分のルーツに近付けたようで、既に感慨深い裕一。

紀子「これかな！」

紀子、大きな箱を抱えようとする。裕一、すぐさま代わりに持とうと、

裕一「ああ、あんまり、無理しないで」

紀子「大丈夫です大丈夫です！夏目さんみたいなお子さんを救うのも、私の役目なん

で！」

裕一「苦笑い　お子さんって……」

紀子「みんな、誰かのお子さんじゃないですか。だから、私は全人類の味方です」屈託

無く笑う紀子。

裕一「……頼もしいね、君は」

紀子「そんなことないです、よく言われます」裕一

「うちの娘に見習わせたいよ。こんなにしっかりとって」

紀子「娘さん、おいくつなんですか？」裕一

「23」

○義博の家の近く・道

花屋の紙袋を持って歩いてくる菜摘。生垣の隙間から、縁側に座っている義博の姿が見える。

菜摘「……おじいちゃん！」

義博が菜摘を見つけて微笑む。
菜摘、咄嗟に笑顔を作り、手を振る。

○日比野家・書斎

裕一と紀子が床に広げた大量の資料を探している。

紀子「仲良しですか？娘さん」裕

一「え？ああ、まあ……」

紀子「笑い わかりやすいですね。喧嘩中とか？」

裕一「え……参ったな」

紀子「まあ、人様のご家庭の問題にまで口出しはしませんけどー」

裕一「苦笑い……」

紀子「子供はね、案外逞しいですよ。親が
れだけ気を揉んだって、勝手に考えて行動して、
勝手に解決したりするもんです」

裕一「そうかなあ……」

談笑しながら一枚の書類を手取る紀子、
顔色が変わる。

紀子「あ……ありました！」裕

一「え！」

紀子「これじゃないですか？夏目裕一、ほ
ら！（と渡す）」

裕一「あった……」

紀子「引受人、今のご両親の名前で間違い無いで
すか？」

養子引受人の欄に義博と郁枝の名前があ
る。

裕一「……はい」

裕一、震える手で産みの両親の氏名を確認
する。

紀子「住所も、一応書いてありますね」裕一

「……」

○義博の家・庭

菜摘が買ってきた花の種を取り出ししている。
る。

菜摘「見てほら、パンジー！おばあちゃん好きだったもんね」

義博「ありがとう」

義博、微笑んで種を植える菜摘を見ている。

菜摘「昔はさ、いっぱい花咲いてて綺麗だったよね、よく遊んでたなあ」

義博「今日はどうした？小遣いか？」

菜摘「違うよ！私社会人だよ？えつと……」菜摘、ゆらゆらと肩を揺らしている。

義博「(なんだ、言いにくい話でもしにきたか」

菜摘「凶星でえ、何でわかったの！？」

義博「そっくりだなお前たち親子は。言いにくいことがあるとゆらゆらゆらゆら」菜摘

「……お父さんも？」

義博「微笑み ああ」

菜摘、義博の隣に腰掛ける。

菜摘「……ねえ、おじいちゃん。お父さんが産まれた時って嬉しかった？」

義博「……」

○日比野家・表

裕一が紀子に見送られている。裕

一「本当にありがとう」

紀子「いいえ、色々悩ませてしまつてすいません」

裕一「いや、感謝してるよ。あなたのお爺さんがいなかったら、俺は産まれてなかったかもしれない」

紀子「安堵し（それは、そうですね）」

裕一「これ、必ずお返ししますんで」

裕一、出生書類を掲げる。

紀子「夏目さんが持つてて下さい。夏目さん

の為に取って置いたようなものですし」裕一

「ああ、そっか。じゃあ、ありがたく。

元気なお子さん、産まれるといいね」

紀子「はい。お気をつけて」

裕一、一礼すると歩き出す。紀

子「夏目さん」

裕一「（振り返り）はい？」

紀子「（考え）いえ、ご両親、会えるとい

いですね」

裕一「……はい。それじゃあ」

手を振って去って行く裕一。

笑顔で手を振り返す紀子だったが、次第に

心配そうな表情に変わる。

紀子「……」

○石巻・市街地

手土産を購入している裕一。

その表情はどこか希望に満ちている。

○義博の家・表

門を足早に出てくる菜摘。

止め処なく溢れる涙を拭いながら歩

裕一、手土産を手に歩いて来る。浮き足立った表情の裕一。

書類を見て立ち止まり周囲を見渡すが、辺りにはそれらしい民家はない。

裕一「（不穩）……」

傍に停まっていたタクシ―の運転手に声をかける裕一。

裕一「（書類を見せ）すみません、この住所

*て……」

寝ていた運転手、不機嫌そうに、運

転手「ああ……あそこ」

運転手の指す方向を見る裕一。そ

こには小学校が建っている。

裕一「え……」

動揺し、運転手に詰め寄る裕一。裕

一「よく見て！これ！この住所！」

驚いた運転手、態度を改め、

運転手「いや、合ってます！あの学校です！」裕一

「……」

タクシーが逃げるように去っていく
取り残される裕一。

裕一「（愕然と）……」

○NPO『舟の会』・事務所（夕）

数組の子供や親たちで賑わう一室。

紀子「じゃあ来月、お待ちしてますね」

去って行く1組の夫婦を笑顔で見送る紀子。
子。

夫婦と入れ違いに入ってくる裕一。

一目で両親に会えなかったことが判る。紀子

「……」

精一杯の笑顔で裕一を迎える紀子。紀子

「お帰りなさい」
（ ）

裕一「無理に笑いありませんでした……」

紀子「そうですか……」

裕一「小学校になってました。そりゃ、そうですよね。昔の住所ですもん」

裕一の笑顔に胸を痛める紀子。

紀子「あの、ちよつとだけ時間ありますか？」

裕一 「……？」

○同・コミュニケーションルーム

紀子、扉を開けて裕一を誘導する。紀子

「どうぞ」

裕一、入って行くと、小さな貸オフィスのような場所。

パーティーションで区切られただけの奥のブースで話し合う、赤ん坊を抱いた女性と1組の夫婦。

紀子「今、まさに養子の委託をしています」裕一
「こんなところで……？」

紀子「分かります。そう思いますよね？でもここはいい方だと思いますよ。今はネットで斡旋して駅前で養子の受渡しをする人もいるみたいですよ」

裕一「そんな、物みたい……」

紀子「酷いですよね。私もそう思います。でも、どこかではそういう人たちが責められない自分もいます」

裕一 「…：…？」

紀子 「大切な命を簡単にネットなんかでって、そりや
思いますよ？でも、彼らのしてるこ

とって、結果的に子供たちを救ってる訳ですよ。
子供を産んだって言う事実を、一生誰にも、私た
ちにさえ知られたくない親だっている訳です。だ
からお金儲けが目的の人は許せないけど、憎むこ
とはできないっていうか。まあ、倫理に反して命
を救うって意味では、うちのおじいちゃんも似た
ようなもんですし」

裕一 「…：…」

ブースでは、生後間もない赤ん坊が母親か
ら夫婦の手に渡される。

嬉しそうに赤ん坊を抱く養親となった夫
婦。

紀子 「私たちは、こうして養親に育てられた子供が
いつか本当の両親に会いたくなった時、その願
いを叶えてあげられるように、なるべく親同士を知
ってもらおうようにして

ます。子供にも親を知る権利があります」

裕一「……」

紀子「夏目さん。私ね、夏目さんはご両親に会えないんじゃないかなって、ちよっと思つてました。すいません」

裕一「……」

紀子「夏目さんみたいな人に、何人かあったことがあります。でも、住所が変わってたり、もう亡くなつてたり……実は笑顔で再会を果たせた人はとても少ないです」

裕一「……」

紀子「夏目さんは、産んでくれたご両親に会えたら、何て伝えたかったですか？」

裕一「……何でしょう、分かりません」

裕一、ひとつひとつ自分の本心を探すように、

裕一「娘に言われたんです。この歳になって本当の親が分かったからってどうなるのかって。いや確かにその通りですよ、別に産んでくれてありがとうとか言うつもりも正

直なかつたし、何で養子に出したんだとか、
まあそれなりの事情があつたんだろぅし：
あれ、何がしたかつたんだろ」

再び無理に笑つてみせる裕一。

紀子「いいんですよ、ただどんな人なのか顔が見て
みたかつたとか。それだつて知る権利です」

裕一「……あ」

紀子「はい？」

裕一「ひとつだけ、知りたかつたことありました」

紀子「なんですか？」

裕一「自分が不幸な人間なのか、確かめたかつたん
だ」

その時、ブースから大きな泣き声が聞こえ
て来る。

嬉しそうな養親の傍ら、泣き崩れる母親の
姿。

母親「幸せにしてあげて下さい……お願いします」

嗚咽しながら養親たちに懇願する母親

裕一「……」

紀子「子供を手放す理由って本当に色々です。中には本当に子供を愛せない親だっていま

す。でも、あのお母さんみたいに、止むにやまれない事情がある人もいます。十月十日、自分のお腹にいた赤ちゃんに情が湧か

ない親っていませんよ。（お腹をさすり）

私も産まれてもないこの子のこと、もう可愛いです。別の人に預けてでも育ててもら

おうっていう人はきつと、それでも生きて、幸せな人生を歩んで欲しいって願う、優しい

親なんだと、私は思います」裕

一「……」

泣き続ける母親を、いつまでも見つめる裕

一。

（ ）

○夏目家・近くの道 夜

すっかり日の落ちた帰り道。

街灯の下を歩いてくる裕一。

ふと見ると、家の表で待っていた菜摘の姿。

裕一「……」

菜摘「おかえり」

裕一「……」

菜摘「ちよつと、いい？」裕

一「？」

菜摘の後を付いて歩き出す裕一。

○喫茶店・中

入って来る菜摘と裕一。菜

摘「ここで待ってて」

空いた席を指差す菜摘。裕

一「え？」

菜摘「いいから待ってて。座ってるだけでいいから」

裕一、戸惑いつつも腰掛ける。菜

摘は少し離れた席に向かう。

既に座っている沢尻の姿を見て、裕一は不倫相手と察する。

裕一「……」

菜摘「ごめんね、お待たせ」不

機嫌そんな沢尻。

沢尻「こんな時間に電話はやばいよ。分かるでし

よ」

菜摘「うん、ごめん。どうしても話したくて」沢尻

「何？しばらく会うの止めようって言っ

たよね？」

菜摘、席に着き、何か言いたそうに肩を揺

らしている。

裕一「……」

菜摘「……うちのお父さんはね、養子なの」沢尻

「……は？」

沢尻同様、戸惑いの表情の裕一。裕

一「……？」

菜摘「お父さんに言われたんだ。父親のいない子供

なんて不幸だって。でも、お父さんは父親どころ

か母親もいなかったの」

裕一「……」

菜摘「今日ね、おじいちゃんの家に行ってきたの。パンジーの種買って」裕

一「……」

裕一、菜摘が自分に向けて話していることに気付く。

沢尻「ごめん、何の話？」菜

摘「いいから、聞いて」

○回想・義博の家・庭

縁側で話す菜摘と義博。

菜摘「……ねえ、おじいちゃん。お父さんが産まれた時って嬉しかった？」

義博、少し考える素振りを見せるが、
()

義博「…… 微笑み 嬉しかったよ」

菜摘「そうなんだ……」

義博「どうしてそんなこと聞く？」

菜摘「……私ね、妊娠したの。不倫相手の子。今迷ってて、子供が産まれるのってどういう気持ちなんだろうと思って」

義博、一瞬驚いた表情を見せるがすぐ

に笑顔になり、

義博 「おめでとう。良かったじゃないか」

菜摘 「（意外で）え……初めて言われた。おめでとうって」

義博 「子供はいいぞ、人生が一段と楽しくなる」

菜摘 「……養子でも？」

義博 「迷わず ああ。一生をかけて愛情を注げる存在が増えるんだ。こんなに幸せなことはない」

菜摘 「お父さんはいつお爺ちゃんの所に来たの？ ……」

義博 「産まれたその日に来たよ」菜

摘 「え……」

義博、思い出すように遠くを見つめる。義博

「おじいちゃんとおばあちゃんにはな、

子供が出来なかったんだ。子供が欲しくて欲しくて、たまらなかった」

菜摘 「……」

義博 「当時は不妊治療なんてものも無かつ

だろう？だから一生二人で生きていくか
なんて覚悟を決めてたんだ。そんな時、あるお
医者さんに出会った」

菜摘 「……」

義博 「そう。愚痴でも聞いてもらおうくらいのつもり
で話してたら、どうしても育てられない事情があ
る妊婦さんが、中絶を希望していることが分か
った」

菜摘 「お父さんの本当のお母さん？」

義博、『本当の』という言葉に、少し寂し
げな表情を浮かべる。

菜摘 「あ、ごめん……」

義博 「いや……。子供を手放さなければいけ
ない夫婦がいて、子供を欲しい夫婦がいた。そこに
子供の命を救いたい医師が出会った。彼は夫婦を説
得してくれたよ。僕ら夫婦の
ために、子供の命のために、産んで欲しいと。
一切の迷惑はかけないからって」

菜摘 「……不安じゃなかった？」

義博 「そりゃあ、不安だったよ。他人が産ん

だ子をちゃんと愛していけるだろうか、
子は
供は懐いてくれるだろうか。でもね、初めて裕
一に会った瞬間、そんな気持ちはどこかに行っ
ていた。必ずこの子を幸せにしなくちゃいけない。
あの瞬間、おじいちゃんは親になったのかわし
れないね」

○喫茶店・中

裕一、菜摘の話を背中で聞いている。裕一
「……」

沢尻「ねえ、ごめん早く帰らないとやばいんだ」

菜摘「もうちよつとで終わるから」

沢尻「ため息……」
()

菜摘「そんなに大切に、本当の子供として育
てて来た息子に、何で今更養子だなんて言った
のか聞いたの」

裕一「……」

菜摘「おじいちゃんね、末期癌なんだって、臍臓
癌。痴呆も進んでるって言った」

裕一 「……！」

菜摘 「あいつはああ見えて優しい。このことを知ったら付きっ切りで介護でもしてくれるだろう。でもね、裕一は産まれながらにして一生分の苦勞を背負ったんだ。もう親に振り回される生き方はさせてはいけない。おじいちゃんの親の役目は、もう終わったんだ」

義博の想いを知り、裕一の目から涙が溢れる。

痺れを切らした沢尻が立ち上がり、沢尻

「帰るわ。意味わかんない」
()

菜摘 「立ち上がり お腹の子供を産むのか、産まないのか、それは菜摘が決めたらいい。でもね……」

沢尻 「？」

裕一 「……」 × ×

回想 続き。 縁側。

義博 「産むと決めたら、命をかけて幸せに

しなさい。そして、君も幸せになりなさい」
× × ×

菜摘、お腹に手を当て、

菜摘「私、この子産む。この子のこと、幸せにした
いから。どんなことがあっても、生きて欲しい
から」

裕一、菜摘の決意にどこか自分自身が救わ
れた気がして、涙が止まらない。

沢尻「(ちよつと)待ってよ……そんなの」
菜摘「遮り あなたに迷惑はかけない。約
束する。この子を大事にしてくれる人が、
ウチにはいるから」

沢尻「……」

菜摘「バイバイ」

菜摘、踵を返して裕一の席を見る。そこ
に既に裕一の姿はない。
菜摘、すつきりとした笑顔で。

○ 銭湯・中

湯船に浸かっている義博。

隣に似たような禿頭が入ってくる。

裕一「あー、染みる！ やっぱこの銭湯いいね」
義博「（見もせず）……」

二人の間に沈黙が流れる。

裕一の肩が僅かに揺れている。裕

一「あのさ、ウチに来いよ」

義博「……」

裕一「家族は多い方がいい」義

博「……断る」

裕一「はあ？ なんで」

義博「俺たちは縁を切った」

裕一「いやいや、俺いって言ってないし。ていう

か、縁は切らないよ？」

義博「……」

裕一「やっぱ俺の親父はあんだと思っただ

よ。じゃ（なきやこの禿頭の説明がつかない）

義博「……思わず笑う」

湯船に、二つの禿頭が並んでいる。

○数ヶ月後・夏目家・表

テロップ『数ヶ月後』

菜摘の声「ただいまー」

○同・和室

襖を開けて入ってくる菜摘と裕一、紗希子。

菜摘の腕には産まれたての赤ん坊が抱かれている。

菜摘「お爺ちゃん、無事産まれたよ」布団に寝たきり状態の義博。

頬はこけ、衰弱でもはや言葉も出ない。紗希

子「お義父さん、見てあげて下さい」

裕一「父ちゃん」

落ち窪んだ眼球がゆっくりと赤ん坊を捉える。

菜摘、裕一の顔の近くに跪く。義

博「……」

義博、震える手を赤ん坊に伸ばす。

○回想・遠い昔・日比野産婦人科・病室

紀子の祖父に抱かれる赤ん坊の裕一
まだ若い頃の義博と郁枝が目を潤ませなが
ら見ている。

紀子の祖父「抱いてあげてください。あなた方の子
ですよ」

義博、震える手を裕一に伸ばす。
その手に触れた瞬間、小さな指が義博の人
差し指を掴む。

義博「はじめまして……」

裕一は幸せそうに眠っている。

(了)